



地域と連携する自然体験型の 観光地を目指して

～自然体験型事業の先駆け、美瑛・富良野エリアの経験から～

富良野市を中心に広がる美瑛・富良野地域は、丘陵地やラベンダーなど景観を楽しむ観光に加えて、空知川やかなやま湖、滝里湖などがあり、早くからラフティングやカヌー、熱気球など、アクティブな自然体験メニューを提供している観光地です。アウトドアメニューを提供する団体は、富良野市・美瑛町・上富良野町・中富良野町・南富良野町・占冠村で20ほどあり、団体間の連携も見られます。

この地域で活動する美瑛・白金ネイチャークラブ代表で、NPO法人グリーンステージ理事長も務める小倉博昭さんと、NPO法人どんころ野外学校の目黒義重代表に、これまでの活動についてお聞きしました。



アルパイン計画から美瑛・白金ネイチャークラブへ

富良野を全国に認知させる大きなきっかけとなったテレビドラマ『北の国から』。1981年に放送が開始され、5年後の'86年にアウトドア体験活動を提供する「アルパイン計画」が設立されました。アルパイン計画は、『北の国から』の脚本家である倉本聰氏から、オーストラリアで行われている自然を生かしたアウトドア体験サービス事業のことを聞いた地元の青年会議所のメンバーによって設立された有限会社です。'90年に然別湖畔に然別湖ネイチャーセンター（現在は「株式会社北海道ネイチャーセンター」）が法人化されていますが、当時、道内で自然体験活動を提供する企業はほとんど見られず、日本国内でも先駆的な事業化でした。

アルパイン計画の事業が大きく展開されるようになったきっかけは、'92年に全日空系列の旅行代理店がアウトドアに着目し、共同でツアーがスタートしたことです。全日空のロゴ入りの熱気球など機材の委託管理を行い、大変なヒット商品になりました。ある程度の個人客のベースができ、修学旅行などの団体ツアーの話が持ちかけられ、新たな人材を確保する時期に東京出身の小倉さんはアルパイン計画に入社します。今から10年ほど前のことです。

アルパイン計画では、同社内にオリジナルツアー企画を担うアルパイントラベル（'95年有限会社に）を'87年に設立。'96年には手作りソーセージやクラフトなどのインドア体験サービスと団体向け営業窓口となる有限会社コロポックルを設立し、'98年には宿泊施設に近い北の峰地区の旧北の峰ホワイトユースホステルを購入してツアー予約や観光案内、宿泊機能も兼ねたアルパインビジターセンターを設置、翌

年に広域エリアのアウトドア事業者ネットワークとして「富良野ネイチャークラブ」を立ち上げます。

小倉さんは、'02年に大雪山国立公園内の美瑛・白金地区のガイド事業を中心に行う有限会社ネイチャークラブを設立し、「美瑛・白金ネイチャークラブ」として、白金温泉を拠点に活動しています。美瑛・白金ネイチャークラブでは、農家を訪ねて収穫体験ができるネイチャリングエコツアーをはじめフォレストウォークや熱気球、レイクカメラのほか、気軽に参加できる散策などのメニューを提供しています。

アクティブな活動は富良野市に本社を置くアルパイン計画を中心に、エコツーリズムを目指す自然体験部門は美瑛・白金ネイチャークラブが国立公園のある美瑛・白金地区を中心に展開する方向ですみ分けしているのです。

緩やかなネットワークを生かす

ネットワーク機能である「富良野ネイチャークラブ」では、一般客の予約を一つの窓口でまとめるほか、1団体が対応可能な客数を超える場合の業者間での連携やメニューパンフレット作成を行うほか、繁忙期と閑散期のスタッフ連携なども行っています。

美瑛・富良野エリアでは、修学旅行生の受け入れが盛んで、多い年には200校ほどの受け入れがありました。修学旅行の受け入れが円滑にできたのは、こうした予約の集中化と情報管理があったからではないかといいます。また、厳しい価格競争も抑制されたという面があります。

その一方で、今ではガイド業者が増え、修学旅行では希望する体験メニューがラフティングに集中する事態になっています。ラフティングの体験場所



ツアー予約や問い合わせのほか、情報提供、宿泊ロッジも兼ね備えたアルパインビジターセンター。



美瑛・白金ネイチャークラブは白金温泉の白金観光センターすぐそば。ホームページは<http://www.nature-club.jp>、問い合わせは0166-94-3555。

ある空知川への影響や、どこを見ても人ばかりという、本来の自然のなかで楽しむ魅力が半減されてしまうという課題が見られるようになってきているのです。ガイドのなかにはヤマセミが見られなくなったなど、実感として自然への影響を感じる人もいるものの、それを証明する基礎データもなく、具体的な対策はなされていません。しかし一方で、修学旅行生の受け入れによってスタッフを通年に近い形で雇用できる側面があることも事実なのです。

ガイド業は社会的な認知がまだ十分でなく、冬期は夏期の10分の1程度の稼働と、季節変動が大きく、国土交通省北海道局が平成14年度に行った『自然体験活動・貴重な自然資源の活用等を通じた地域活性化方策調査』では、ガイドのモデル年収は幹部クラスで350万円、新入社員で200万円程度となっており、半年のアルバイトの場合は初年度で80万円程度、3年目でも130万円程度と、待遇面では魅力あるものとはいえない状況で、年収500~600万円といわれる屋久島のガイドとは程遠い状況にあります。また、時間内で仕事をこなすだけでスキルアップできるものでなく、専門知識の蓄積や経験、どんな状況でも対応できるような日々の努力が必要な仕事でもあります。経営基盤のぜい弱なアウトドア事業者にとってみれば、経営面はもちろん、ガイドのスキルアップにもこうしたネットワークは有効なものになります。

小倉さんが別会社を設立した背景にも、ガイドのような仕事は、会社員として働くのではなく、自分の生活は自らで稼いでやっていくくらいの気持ちが必要不可欠という思いがあったからです。数年間は雇用される形で経験を積む期間があっても、その後はのれん分けし、個々の事業者が緩やかなネットワークでつながっていくことで、客の分散化が

図られ、環境への負荷も減らすことができるのではないかと考えているのです。

量から質のエコツーリズムを目指して

小倉さんが富良野市にあるアルパイン計画の事務所ではなく美瑛町白金温泉にあえて会社を設立したのは、もう一つ理由がありました。富良野が本拠地となれば、活動エリアである美瑛・白金地区の住民や行政側はどうしても他のまちの一事務所というとならえ方になってしまい、地域で盛り上げる機運にはならないのではないかと考えていたからです。地域に根差して展開していくためにも美瑛町にある会社にしたかったのだといいます。

美瑛・富良野エリアでは'01年度に680万人弱の入込数があるものの、その8割が日帰り客で、通過型の観光地です。地元では入込数を増やす集客発想がまだまだ根強く、滞在型で域内消費をうながすような量から質への発想転換にはつながっていないようです。

そのような状況のなか、今後小倉さんが目指す一つの方向にエコツーリズムがあります。農業の収穫体験や地元産食材を使ったスローフードを提供する店への案内など、地域産業と一体となったエコツーリズムを根付かせていきたいと考えています。

そして、十勝岳連峰南側の広域エリアを対象として、「エコツーリズム」と「サステナブル（持続的な）」をキーワードにした「NPO法人グリーンステージ」が設立されたのです。グリーンステージでは滞在型観光の促進活動や人材育成事業、自然環境の保全活動、地域振興活動などを行っており、エコツーリズムの普及啓蒙やコーディネート機能を担っています。理事にはエリア内で活動する自然ガイドや宿泊業、山岳会や農家、会社員などが名を連ね、新しいネットワークが生まれています。



ツリークライミングはコラムニストでツリークライマーであるジョン・ギャスライト氏によって国内に知られるようになり、同氏が理事長を務めるNPO法人ツリークライミングジャパンが設立されている。

「ツリークライミングは植樹体験などを組み合わせることで相乗効果も期待できる」と小倉さん。



グリーンステージでは新しいメニューの普及や講習会などの開催を計画していますが、今後、積極的に取り組んでいこうとしているのが、ツリークライミングです。高さ10m近いところにある木の枝にロープを渡して登っていくもので、初心者でも簡単に登ることができ、木の上から今までとは違った視点で森の眺めを楽しめるというもので、美瑛・白金ネイチャークラブで既に提供しているメニューです。

農業では収穫体験など分かりやすいメニューがいろいろ考えられますが、林業の場合、植樹などは実感するのに時間がかかります。木に触れる、登ることで興味を持ってもらうことができる上、北海道向きで、かつ、冬の目玉メニューになる可能性を秘めています。今後、グリーンステージでは小倉さんを含めて道内で3名しかいない公認ファシリテーター養成のための講習などを企画し、新しいツアーメニューの一つとなるよう積極的に取り組んでいきたいと考えています。

「北国の特徴を生かして、冬の寒さときれいな雪を実感してもらうことが北海道の目玉。最終的にそこにたどり着くことができればと思っています。また、グリーンステージではガイドのスキルアップにつながる勉強会などもできれば」と小倉さん。10年の経験を経て、次のステップを踏み出しています。



目黒さんが最初に手がけた研修棟は手作り。

※ 公認ファシリテーター
アメリカに本部を置くツリークライミング愛好家たちの世界的なネットワークであるツリークライマーズインターナショナル (TCI) の日本支部「ツリークライミングジャパン」によって認定される資格。安全で基本的な広葉樹向けクライミング方法を認められる「ベーシックツリークライマー」、その資格を取得した者で針葉樹向けのテクニックをマスターする「ツリークライマー」を経て、多くのイベント経験を積んで、ジョン・ギャスライト氏によって認められたクライマーに与えられる資格が公認のファシリテーターである。この資格を取得することで、一般人を対象としたツリークライミングイベントを開催することができる。

野外活動の指導者養成を目指すどんころ野外学校

'89年に南富良野町に設立された「どんころ野外学校」は、植村直己・帯広野外学校設立当初にボランティアでかかわった目黒さんが立ち上げた野外活動の指導者養成を目的とした野外学校です。今から20年ほど前、通年で活動できる野外学校設立を目指し、知床や大雪山周辺で候補地を探したところ、近隣町村がリゾートブームに沸いていたなかで、南富良野町が前向きな対応を示してくれたことや閉鎖された町有牧場の跡地があったことから、南富良野町落合に本拠地を構え、自身の手で研修棟やキャンプ場などを整備し、現在に至っています。

当初は野外活動指導者に対する社会的な認知も低く、養成コースへの申し込みはほとんどなかったといいます。そこで、教育大学を中心に教育実習のような形で、子どもを対象にしたキャンプを受け入れたところ、キャンプ活動のなかで子どもに自然体験をさせるメニューとして川遊びや自然探索などが取り入れられ、アウトドアブームに乗って、今ではラフティングやカヌー、カヤックやハイキング、冬にはネイチャースキーや犬ぞりツアーなど、一般客の受け入れが事業の中心を占めるようになったのです。

これまでは活動に見合った適当な法人形態が見当たらなかったため任意団体として活動してきましたが、昨年NPO法人として認証されました。

どんころ野外学校はもともと指導者養成を目指していたことから、利益のみにこだわらず、丁寧な対応をしてくれるため、お客さんの7、8割はリピーターで、新規客でも口コミによるものが多いといいます。また、口コミ以外の情報源はホームページが多く、当初は道外客中心だったのが、今では道内客も4割程度になったといいます。道内客もアウトドア活動にお金を使う基盤が徐々にできているようです。



キャンプ場にある炊事棟。複数の団体からキャンプ予約が入るため、敷地内に二つのキャンプ場がある。



どんころ野外学校への問い合わせは0167-53-2171。ホームページは、<http://www1.ocn.ne.jp/~donkoro/>。

地域との結び付きをいかに図るか

当初は町内にどこも野外学校しかなかった自然体験活動を受け入れる団体もアウトドアブームとともに増え、どこも野外学校を含めて現在は4団体となっています。南富良野町でも修学旅行の受け入れが盛んで、去年は町内の業者で「南富良野ネイチャーセンター」を設立し、こうした団体に共同で対応できる体制を整えています。また、地元の南富良野高校が北海道アウトドア資格制度人材育成機関の正式認定を受けるなど、町内での連携や理解が深まりつつあります。

しかし、昔から暮らしている地元住民にとっては、これまであまり聞いたこともないような業種で、とまどいがあることも事実。地域とのコミュニケーションがない団体など、地元とのあつれきが生まれていることも否めません。地域との連携をいかに図っていくかが一つの課題ともいえます。

今後、目黒さんは当初の設立目的である指導者養成だけでなく、農業や林業など一次産業にかかわる分野についても積極的に取り組んでいきたいと考えています。敷地内では既に豚の養育や農作物の生産を手がけており、町内北落合や中富良野町には提携農家もあるといいます。農業体験や植樹のニーズもあり、提携農家での農業体験や記念植樹は既に行っています。

「カヌーやラフティングは華やかで収益も上がりますが、それほど長く続くものではないと思っています。決してカヌーやラフティングを軽んじるわけではないのですが、農業や林業関係、あるいは建築や工芸など、生産的な分野も充実させて、生産活動もできるようになれば」と将来を見据えます。エコツーリズムの視点を生かした展開が、地域との連携を図る一つの鍵になるように感じます。

地域内のネットワークが鍵に

アウトドアブームや修学旅行生の受け入れで、美瑛・富良野エリアには多くの自然体験型事業団体がありますが、既にご紹介したように各地域で団体間のネットワークができています。また、ラフティングやカヌーなど川にかかわるメニューを提供する団体が多いことから、統一のローカルガイドルールやレスキュー体制の確立など、川にかかわる安全管理面でのネットワーク組織として「空知川会連絡協議会」が立ち上がっています。

北海道では、アウトドア活動分野の人材育成を目指して「北海道アウトドア資格制度」が整備されていますが、今後の運用によっては形骸化してしまうのではないかと懸念があります。画一的な資格制度によって、地域の特性を生かしたメニューや資格を持っていなくても地域情報に詳しい宿のオーナーなど、優秀な人材を埋もれさせてしまう可能性も否めません。しかし、美瑛・富良野エリアのような地域内でのネットワークがあることで、こうした課題を解決する糸口が見つかるのではないのでしょうか。

自然体験活動を提供する事業は、個々の企業活動としては弱い側面もありますが、美瑛・富良野エリアでの経験からはネットワークが一つのキーワードとして浮かび上がってきます。事業者間の連携によって地域の安定した産業への展開が可能になると思われます。今後は地域と連携した取り組みやツアー開発のほか、収益の上がる修学旅行などの団体受け入れと、エコツアー的な要素をうまく組み合わせ、自然に配慮し、自然と親しむ体験型観光地としての発展が望まれます。



高校時代から山登りを始め、当初は山のガイドを目指していたという目黒さん。